



特別支援教育の充実をめざして

特別支援教育とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導および必要な支援を行うものです。平成19年4月から「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援をさらに充実していくことになりました。



本校においても、障害種別ごとの特別支援学級と、発達障害がある児童を対象にした通級指導教室が設置されており、個別の教育的ニーズに応じた教育をめざしているところです。その中心になっている教員が、通級指導教室担当兼特別支援教育コーディネーターの中野先生です。先生は本校だけでなく、観音寺市内のほかの小学校にも通い、子どもたちを指導、支援しています。今回の天王丘では、そんな中野先生に「思い」をつづってもらいましたので紹介します。



ちびっこ水泳教室

通級指導教室担当 中野 広司

幼少時より運動が苦手だったのですが、水泳だけは何故か人並みにできました。

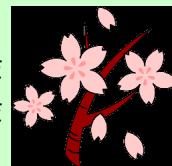
毎年夏になると、運動部の指導の一環として、プールの6コースにて、泳ぎが苦手な子を対象とした「ちびっこ水泳教室」を開きます。ここにやって来る子は、どの子も「泳ぎがうまくなりたい」という意欲に満ちています。素直で真剣なまなざしを向けて、うなずきながら話を聞いてくれます。

ぼくの水泳教室は、「今日、何ができるようになったら、グータッチでイエーイ！と喜びたいほど嬉しいですか？」という聞き取りからスタートします。当たり前のことですが、ここでは、一人一人目標が違います。「今日はみんなにクロールの手を教えよう」などというアバウトな計画は、何の役にも立ちません。ゴーグルをつけて潜って、その子がどこで困っているのか、その原因を探します。3名から5名くらいの子どもが、5メートル泳いでは、よくなった点を褒めてもらって、次のアドバイスを受けます。プラン・ドゥ・チェック・アクションの連続です。少しでも改善に向けて努力した点を見つけては、しっかり褒(ほ)めます。子どももぼくも、どんどんテンションが上がっていき、気がつけば、当初の目標達成に限りなく近づいています。試験タイムになると、プールサイドでこれから泳ぐ子の応援をします。時には、6コースのプールの中をみんなで移動しながら「いける！ ぜったいいける！」などと、すぐ近くから声援を送ります。この夏も、「ぼくは水泳が苦手で、クロールの仕方すら分からない。25メートルなんて、一度も泳いだことがない。」と言っていた4年生の男子が、チャレンジ1回で25メートルを泳ぎ切り、みんなで歓喜の声を挙げました。

ぼくは、「ちびっこ水泳教室」に来てくれた子どもたちを、プールから上がった後も応援し続けます。「あの時はよく頑張ったね。何か困っていることはないですか？」廊下や教室の前で会うたびに声をかけます。

秋になり、冬になり、学年が上がってやがて6年生に。「私は、運動は得意な方ではないから」と、自信なさそうにしていたあの子が、陸上でも努力を重ね、学校代表のリレーメンバーとして丸亀競技場を駆け抜けます。学級委員や児童会の役員に選ばれることもしばしばです。

「やはり、みんなは真面目にコツコツ頑張るあなたのことを、ちゃんと見てくれていますね。」はにかみながらぼくを見つめ直してくれる、あの時と変わらぬ、素直で、そして自信に満ちたまなざしを見るたびに、教師として子どもの成長に関わることでできた喜びを味わうことができます。そして、卒業後もずっと応援することを誓い、将来に渡っての幸せを願うのです。



子どもの将来にわたっての幸せは、その成長に関わった大人すべての願いです。卒業する6年生には、柞田小学校で学んだことを生かし、中学校でさらに大きく成長してほしいと思います。

特別支援教育は、福祉や人権の観点からもその充実が求められています。お子様のことで気になることがあれば、ぜひ学級担任までご相談ください。学校では、保護者の方といっしょに、お子様の発達や成長について考えていきたいと思っています。